

補足：角度積分

自己エネルギーの計算に現われる角度積分を実行する方法を示しておきます。

「光子の自己エネルギー」や「電子の自己エネルギー」では角度積分をちゃんとした方法で計算していませんでしたので、ここではちゃんといきます。といっても変なことをしないで出来ます。

表記で混乱するかもしれないので、定義をちゃんといっておくと、 p^2 は $p_0^2 - \mathbf{p}^2$ で、このときの p_0 は $p_0 = i\omega_n$ です。

どのような積分が出てくるのかというと

$$K_1 = \int_0^\pi d\theta \sin\theta \left(\frac{1}{(p_0 - |\mathbf{k}|)^2 - E^2} + \frac{1}{(p_0 + |\mathbf{k}|)^2 - E^2} \right)$$

$$K_2 = \int_0^\pi d\theta \sin\theta \cos\theta \left(\frac{1}{(p_0 - |\mathbf{k}|)^2 - E^2} + \frac{1}{(p_0 + |\mathbf{k}|)^2 - E^2} \right)$$

みたいなものです。他にも出てきますが、基本的に同じなのでこの二つを使います。ここでの E は

$$E = |\mathbf{k} - \mathbf{p}| = \sqrt{\mathbf{k}^2 + \mathbf{p}^2 - 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|\cos\theta}$$

のようにしています。

角度積分に移る前に、式変形の話をしておきます。松原振動数の和をとった後の形として

$$I = -e^2 \int \frac{d^3k}{(2\pi)^3} \frac{n_F(E)}{4|\mathbf{k}|E} \left(-\frac{1}{p_0 - |\mathbf{k}| - E} + \frac{1}{p_0 + |\mathbf{k}| + E} + \frac{1}{p_0 + |\mathbf{k}| - E} - \frac{1}{p_0 - |\mathbf{k}| + E} \right)$$

こんな形のものが現われたりします（電子の自己エネルギーの計算で実際に出てくるものです）。このフェルミオンの分布関数にいる角度依存性をなくすために、 \mathbf{k} を $\mathbf{k}' = \mathbf{k} - \mathbf{p}$ に置き換えて、 $-\mathbf{k}'$ にします。そうすれば、 $E = |\mathbf{k} - \mathbf{p}|$ は $|\mathbf{k}'|$ になるので (\mathbf{k}' は \mathbf{k} と書きます)

$$\begin{aligned} I &= -e^2 \int \frac{d^3k}{(2\pi)^3} \frac{n_F(|\mathbf{k}|)}{4|\mathbf{k}|E} \left(-\frac{1}{p_0 - E - |\mathbf{k}|} + \frac{1}{p_0 + E + |\mathbf{k}|} + \frac{1}{p_0 + E - |\mathbf{k}|} - \frac{1}{p_0 - E + |\mathbf{k}|} \right) \\ &= -e^2 \int \frac{d^3k}{(2\pi)^3} \frac{1}{4|\mathbf{k}|E} n_F(|\mathbf{k}|) \left(\frac{-2E}{(p_0 - |\mathbf{k}|)^2 - E^2} + \frac{-2E}{(p_0 + |\mathbf{k}|)^2 - E^2} \right) \\ &= e^2 \int \frac{d^3k}{(2\pi)^3} \frac{1}{4|\mathbf{k}|} 2n_F(|\mathbf{k}|) \left(\frac{1}{(p_0 - |\mathbf{k}|)^2 - E^2} + \frac{1}{(p_0 + |\mathbf{k}|)^2 - E^2} \right) \end{aligned}$$

となって、分布関数から角度依存性をなくせます。このように変形できるのは3次元の全空間積分があるためだということには注意してください。

K_1 と K_2 の角度積分を行っていきます。このとき、 p_0 は純虚数 ($i\omega_n$) であることに注意してください。 K_1 は

$$\begin{aligned}
K_1 &= \int_0^\pi d\theta \sin \theta \left(\frac{1}{(p_0 - |\mathbf{k}|)^2 - E^2} + \frac{1}{(p_0 + |\mathbf{k}|)^2 - E^2} \right) \\
&= \int_{p^2 - 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|}^{p^2 + 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|} dx \frac{1}{-2|\mathbf{k}||\mathbf{p}|} \left(\frac{1}{x - 2p_0|\mathbf{k}|} + \frac{1}{x + 2p_0|\mathbf{k}|} \right) \quad (x = p^2 + 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}| \cos \theta) \\
&= \int dx \frac{1}{-2|\mathbf{k}||\mathbf{p}|} \left(\frac{x + 2p_0|\mathbf{k}|}{x^2 - 4p_0^2|\mathbf{k}|^2} + \frac{x - 2p_0|\mathbf{k}|}{x^2 - 4p_0^2|\mathbf{k}|^2} \right) \\
&= \int dx \frac{1}{-2|\mathbf{k}||\mathbf{p}|} \frac{2x}{x^2 - 4p_0^2|\mathbf{k}|^2} \\
&= \frac{1}{2} \int dx^2 \frac{1}{-2|\mathbf{k}||\mathbf{p}|} \frac{1}{x^2 + y^4} \quad (y^4 = -4p_0^2|\mathbf{k}|^2 = 4\omega_n^2|\mathbf{k}|^2) \\
&= \frac{1}{-2|\mathbf{k}||\mathbf{p}|} \log |x^2 + y^4| \\
&= \frac{1}{-2|\mathbf{k}||\mathbf{p}|} \log \left| \frac{(p^2 - 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|)^2 - 4p_0^2|\mathbf{k}|^2}{(p^2 + 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|)^2 - 4p_0^2|\mathbf{k}|^2} \right|
\end{aligned}$$

K_2 はこれに $\cos \theta$ がくっついているだけなので、同様にしていくことで

$$\begin{aligned}
K_2 &= \int_0^\pi d\theta \sin \theta \cos \theta \left(\frac{1}{(p_0 - |\mathbf{k}|)^2 - E^2} + \frac{1}{(p_0 + |\mathbf{k}|)^2 - E^2} \right) \\
&= \int dx \frac{1}{-2|\mathbf{k}||\mathbf{p}|} \frac{x - p^2}{2|\mathbf{k}||\mathbf{p}|} \frac{2x}{x^2 + y^4} \\
&= \int dx \frac{2}{-4|\mathbf{k}|^2|\mathbf{p}|^2} \left(\frac{x^2}{x^2 + y^4} - \frac{p^2 x}{x^2 + y^4} \right) \\
&= \frac{2}{-4|\mathbf{k}|^2|\mathbf{p}|^2} \left(\int dx \frac{x^2}{x^2 + y^4} - \frac{1}{2} \int dx^2 \frac{p^2}{x^2 + y^4} \right) \\
&= \frac{2}{-4|\mathbf{k}|^2|\mathbf{p}|^2} \left[x - y^2 \arctan \frac{x}{y^2} - \frac{p^2}{2} \log |x^2 + y^4| \right] \\
&= \frac{2}{-4|\mathbf{k}|^2|\mathbf{p}|^2} \left[p^2 - 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}| - p^2 - 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}| \right. \\
&\quad \left. - y^2 \left(\arctan \frac{p^2 - 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|}{y^2} - \arctan \frac{p^2 + 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|}{y^2} \right) - \frac{p^2}{2} \log \left| \frac{(p^2 - 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|)^2 + y^4}{(p^2 + 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|)^2 + y^4} \right| \right] \\
&= \frac{2}{-4|\mathbf{k}|^2|\mathbf{p}|^2} \left[-4|\mathbf{p}||\mathbf{k}| - y^2 \left(\arctan \frac{p^2 - 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|}{y^2} - \arctan \frac{p^2 + 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|}{y^2} \right) \right. \\
&\quad \left. - \frac{p^2}{2} \log \left| \frac{(p^2 - 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|)^2 + y^4}{(p^2 + 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|)^2 + y^4} \right| \right]
\end{aligned}$$

これで角度積分は終わりです。ついでに、 T^2 のオーダを出しておきます。

高温極限を取った時に T^2 のオーダを出すのは \arctan の項です。角度積分部分だけでは分からないので、実際に現われる $|\mathbf{k}|$ 積分の形を使うことにします。例えば

$$\int_0^\infty d|\mathbf{k}| \frac{|\mathbf{k}|}{\omega_n} \left(\arctan \frac{p^2 - 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|}{2\omega_n|\mathbf{k}|} - \arctan \frac{p^2 + 2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|}{2\omega_n|\mathbf{k}|} \right) n_B(|\mathbf{k}|)$$

このようにして出てきます。簡単にするために、 $p^2 = 0$ という特殊な状況に設定すると

$$\begin{aligned} & \int_0^\infty d|\mathbf{k}| \frac{|\mathbf{k}|}{\omega_n} \left(-\arctan \frac{2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|}{2\omega_n|\mathbf{k}|} - \arctan \frac{2|\mathbf{p}||\mathbf{k}|}{2\omega_n|\mathbf{k}|} \right) n_B(|\mathbf{k}|) \\ &= -2 \int_0^\infty d|\mathbf{k}| \frac{|\mathbf{k}|}{\omega_n} n_B(|\mathbf{k}|) \arctan \frac{|\mathbf{p}|}{\omega_n} \end{aligned}$$

となり、 $|\mathbf{k}|n_B(|\mathbf{k}|)$ の積分は T^2 のオーダーなので、この部分が T^2 のオーダーとなります。さらに、 \arctan を変形すると

$$\begin{aligned} i \arctan \frac{|\mathbf{p}|}{\omega_n} &= \frac{1}{2} \log \frac{i - |\mathbf{p}|/\omega_n}{i + |\mathbf{p}|/\omega_n} \\ &= \frac{1}{2} \log \frac{i\omega_n - |\mathbf{p}|}{i\omega_n + |\mathbf{p}|} \end{aligned}$$

そして、解析接続することで

$$\begin{aligned} & -2 \int_0^\infty d|\mathbf{k}| \frac{|\mathbf{k}|}{i\omega_n} n_B(|\mathbf{k}|) i \arctan \frac{|\mathbf{p}|}{\omega_n} \\ & \Rightarrow -2 \int_0^\infty d|\mathbf{k}| \frac{|\mathbf{k}|}{p'_0} n_B(|\mathbf{k}|) \frac{1}{2} \log \frac{p'_0 - |\mathbf{p}|}{p'_0 + |\mathbf{p}|} = -\frac{\pi^2 T^2}{6} \frac{1}{p'_0} \log \frac{p'_0 - |\mathbf{p}|}{p'_0 + |\mathbf{p}|} \end{aligned}$$

これは HTL 近似を取った時の形と同じになっていることが分かります。なので、 $p^2 = 0$ はちょうど高温極限になっています (解析接続する前に $p^2 = 0$ としています、結局同じになります)。

最後に、高温極限を取ったときに現われる T のオーダーがなんなのかを見積もる方法があることを言っておきます。それは、積分の発散のオーダーを見るというもので、高温極限を取った時の T のオーダーは分布関数を失くした時の紫外発散のオーダーに対応していることがほとんどとなっています。ほとんどという表現にしているのは、違う場合があるためです。簡単にこのことを説明しておきます。

Weldon は運動量積分の紫外発散のオーダーと、高温極限での T のオーダーが対応していることを示し、それはほとんどの場合で当てはまっていました (phys.rev.D 26,2789 に載っているらしい)。そして、Weldon はフェルミオンの自己エネルギーのゲージ固定項での紫外発散が 1 次発散であったために、温度の寄与も T だろうと予想していました。しかし、Wang(hep-ph/0406002v2) による高温極限の計算から $\log T$ のオーダーの寄与であることが求められました。なので、ゲージ固定項の高温でのオーダーが紫外発散のオーダーがずれています。このためにほとんどという表現を使いました。また、このようにゲージ固定項からの寄与が T^2 でないために、電子の自己エネルギーは T^2 のオーダーでゲージ不変な量となり、HTL 近似がゲージ不変になっています。